

日本スポーツ人類学会第19回大会

- 主催 日本スポーツ人類学会
- 期 日 平成30(2018)年3月26日(月)・27日(火)
- 会 場 愛媛大学 城北キャンパス総合情報メディアセンター
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

■ 会場へのアクセス

松山空港からリムジンバスまたは路線バスで、JR松山駅前下車し(約30分)、松山駅前伊予鉄路面電車鉄砲町下車(約15分)、徒歩約5分で会場に着きます。

または、空港からタクシー(約25分)。

■ アクセスマップ



■大会会場



大会参加者へのご案内

1. 大会受付

場所： 愛媛大学 城北キャンパス 総合情報メディアセンター

時間： 3月26日（月） 12時00分～

3月27日（火） 9時00分～

登録： 受付にて参加登録をしてから資料等をお受け取り下さい。

2. 参加費

一般4,000円、学生2,000円（未納の方は納入をお願いいたします。）

3. ネームプレート

会場内では、ネームプレートの常時着用をお願いいたします。

4. 昼食について

3月26日（月）・27日（火）両日は生協食堂、懇親会場のhacoが営業をしています。また、会場から徒歩5分以内に、セブンイレブン、ローソンがありますので、適宜ご利用ください。

5. 懇親会

日時：3月26日（月） 18:00～20:00

場所：愛媛大学城北キャンパス haco

会費：5,000円

（お申込みくださった方で、会費未納の方は受付にてお支払い下さい）

6. 大会プログラム・抄録集

会場にてお渡しいたします。

※ クロークは用意しておりませんので、お荷物はそれぞれの座席までお持ちいただくか、メディアホール裏のスペースをご利用ください。

一般研究発表者へのご案内

1. 発表受付

発表の受付は、大会受付とともにお済ませください。

2. 発表時間

発表時間は30分（発表20分、質疑応答10分）です。

発表終了3分前、発表終了時、質疑応答終了時に予鈴を鳴らします。

次演者は、前演者が登壇されたら、次演者席にて待機してください。

3. 発表データの作成

会場に用意する発表用PCのOSとアプリケーションは次のとおりです。ご確認ください。適する発表データの作成をお願いいたします。

OS Windows 7 Professional

Appli. Power Point 2010

Appli. Windows Media Player 12

○パワーポイントを使用する場合は、USBメモリに保存したファイルをご持参ください。

○データファイルは、会場の発表用PCにアップロードし、動作確認を行ってください。

○個人用PCの使用をご希望の場合は、事前に大会事務局までご連絡ください。

○Macご使用の方はPCと専用ケーブルもご持参ください。

○会場に設置されているBlu-rayプレイヤー、書画カメラ（実物投影機）を使用することも可能です。

4. 配布資料

資料の配布をご希望の場合は、60部ご用意いただき、大会受付にご提出ください。

余った資料は2日目の大会終了後にお持ち帰りください。

大会プログラム

1日目 3月26日(月)

12:00～受付				
10:30～ 13:00		理事会・編集委員会		
番号	時間	演題	発表者	座長
1	13:00～ 13:30	ドイツにおける少年柔道の指導法の展開 及びその現状	ソリドール、 マーヤ (津田塾大学)	田里 千代 (天理大学)
2	13:30～ 14:00	スポーツと文化のはざままで —スペイン・カタール—ニヤ州の人間の塔を事例に—	岩瀬 裕子 (首都大学東 京大学院)	
休憩 14:00～14:10				
3	14:10～ 14:40	日本の地域社会における伝統スポーツの 文化資源的可能性 —岩手県久慈市山形町における「平庭闘牛」の 形成と発展—	小木曾 航平 (早稲田大学) 田邊 元 (富山大学芸 術文化学部)	一階 千絵 (群馬県立女 子大学)
4	14:40～ 15:10	「竿灯祭り」に出たい！ —県大竿燈会にみる担い手の多様化と地域コミュ ニティの再編—	田邊 元 (富山大学芸 術文化学部)	
5	15:10～ 15:40	大崎上島における權伝馬への商船高専としての 支援の現状と課題	柴山 慧 (広島商船高 等専門学校)	
休憩 15:40～16:00				
16:00～ 18:00	シンポジウム			
	テーマ 「信仰と身体」			
	パネリスト 寺内 浩 (愛媛大学法文学部附属四国 遍路・世界の巡礼研究センター長)			
	瀬戸 邦弘 (鳥取大学教育センター)			
	鄭 稼棋 (鹿屋体育大学)			
	司会 石井 浩一 (愛媛大学教育学部)			
憩親会 (愛媛大学城北キャンパス haco)				
18:10～ 20:00				

2日目 3月27日(火)

9:00～受付				
番号	時間	演題	発表者	座長
6	9:30～ 10:00	『中国古典舞教学体系創建発展史』にみる 現代中国舞踊の歩み	富 燦霞 (明治大学ア ジア太平洋パ フォーミン グ・アーツ研 究所)	弓削田 綾乃 (人間総合科 学大学)
7	10:00～ 10:30	日韓併合時代における「處容舞」の分析	蔡 美京 (明治大学ア ジア太平洋パ フォーミン グ・アーツ研 究所)	
休憩 10:30～10:40				
8	10:40～ 11:10	新たな琉球舞踊の創出 —「伝統」と「創造」の狭間で揺れ動く若手舞踊 家の事例から—	高井 賢太郎 (沖縄県立芸 術大学大学院 音楽芸術研究 科)	波照間 永子 (明治大学)
9	11:10～ 11:40	盆踊りの多様性 —健康文化の側面に着目して—	弓削田 綾乃 (人間総合科 学大学)	
10	11:40～ 12:10	米国・ハワイ州におけるルアLuaの伝承	高橋 京子 (フェリス女 学院大学)	
休憩 12:10～13:10 (日本体育学会スポーツ人類学専門領域世話人会)				
11	13:10～ 13:40	ブラジルにおける格闘技の意義	菱田 慶文 (四日市看護 医療大学) 細谷 洋子 (四国大学) 中嶋 哲也 (茨城大学)	神戸 周 (東京学芸大 学)
12	13:40～ 14:10	カポエイラの身体技法「ジンガ」と理念マリーシア —ブラジルサッカーを題材にした映画による描写を手掛 かりにして—	細谷 洋子 (四国大学)	
13	14:10～ 14:40	源 了圓の「型」論再考 —新陰流の稽古法を事例にして—	中嶋 哲也 (茨城大学)	石井 隆徳 (日本体育大 学)
14	14:40～ 15:10	戦前期「日本近代競馬」の形成過程 —帝室御章典を事例に—	高橋 一友 (京都大学大 学院人間・環 境学研究科)	
休憩 15:10～15:20				
15:20～ 15:35	編集委員会			
15:35～ 16:10	総会			

《シンポジウム》

信仰と身体

パネリスト：寺内 浩（愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長）
瀬戸 邦弘（鳥取大学教育センター）
鄭 稼棋（鹿屋体育大学）

司 会：石井 浩一（愛媛大学教育学部）

【シンポジウムの趣旨】

本シンポジウムでは、「身体実践」を通して得られる価値を検証するものである。テーマとしては「信仰空間」に注目し、①四国遍路と身体、②西大寺観音院における会陽と身体、③出羽六十里越街道と身体という、三つのテーマを取り上げてそれらに関して身体実践の報告が行われる。

「①四国遍路と身体」は、本大会が行われる四国で受け継がれ、そして信仰実践の形を現在でも持っている四国遍路に関するものである。本事例報告では、特に八十八箇所を巡るという苦行とその実践、そこに求められ達成される価値についての報告がなされる。

「②大寺会陽と身体」であるが、岡山市に位置する西大寺観音院では毎年2月に「会陽」という行事が行われている。会陽とは密教系の寺院で行われる春迎の行事で結願日には「宝木」と呼ばれる一対二本の神木を大勢も裸衆が奪い合う。この行事は最近あまり見られなくなったが、かつては瀬戸内沿岸地域に散見されたものであり、地域文化の一つとも言える。本事例報告では参加者たちが精進潔斎し得られる身体観と求める価値に関する報告が行われる。

「③十里越街道と身体」では、山形県庄内地方と内陸を結ぶ六十里越街道に関する研究報告がなされる。この道は1200年以上の昔に開かれた険しい山道であり、山岳信仰が盛んだった室町～江戸時代には、「ご神体」を求めて、東北や関東各地から訪れる参詣者たちで賑わったといわれている。一方で、明治以降、新道の開通や価値観の変化に伴い、歴史の表舞台から退いた。しかし、六十里越街道には今日でも数多くの史跡が存在し、「信仰」と「自然」「歴史」を体験できる観光スポットとして注目されている。本事例報告では観光化と信仰実践の価値の相克に関して報告が行われる。

本シンポジウムでは①②③の事例報告にてそれぞれ紹介された「身体」とその扱われ方をベースに、信仰空間において身体がメディアとして如何に利用され、人と神仏、また社会と結びつけているのかを検証する。さらに、それら議論をベースに、視点を文化としてのスポーツにおける「身体」についても広げ、民族、国際の如何を問わず、スポーツ活動の根源として存在しつづけてきた「身体」とその「実践」を通して得られる文化的価値を検証するものとなる。

（文責 石井 浩一）

【各パネリストの発表概要】

四国遍路と身体

寺内 浩（愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長）

四国遍路は88の札所を巡る巡礼である。徳島県鳴門市の1番札所霊山寺から、香川県さぬき市の88番札所大窪寺までの距離は約1200km、所要日数は、徒歩で約50日、車で10日余りである。巡り方は全く自由で、番号順でもよいし、逆に巡ってもよい。また、1番や88番からではなく、どこから巡ってもよく、すべて巡れば「結願」となる。遍路者の年間人数は、正確な数字を出すのは難しいが、だいたい15万人～20万人と推定されている。遍路者のスタイルは、基本的に自由だが、菅笠、金剛杖、白衣、輪袈裟が伝統的スタイルとされている。

四国遍路は約1200年前ころに始まったといわれる。そのころの四国遍路は、僧侶や山伏などのプロの宗教者が、宗教的諸能力（法力・験力）を身につけるための修行として、岬の洞窟や山林のなかで経文や呪言をととなえ、そして海岸部や山中を巡り歩くというものであった。これを「辺地修行」といい、四国遍路の開祖とされる弘法大師空海もそうした辺地修行者の一人であった。

戦国時代末～江戸時代初ころに四国遍路は大きく変化する。数多くの寺社から88の札所が選ばれ、四国遍路はそれを巡る形式になる。それにともない、一般の人々が四国遍路の主体となる。古代中世の四国遍路は山伏や僧侶などのプロの宗教者が行うきびしい修行であったが、江戸時代から現代と同じように一般の人々が88の札所を巡る巡礼になる。

昭和40年代ころから日本はモータリゼーションが進み、四国遍路の移動手段も車を中心となる。現代の四国遍路では、乗用車やバスなどの車を利用する人の数は8割を越えている。ただ、これだけの車社会になっても、約1割の人が徒歩での遍路（歩き遍路）を行っている点は注目すべきである。1200kmの遍路道を踏破することは決して容易なことではない。そこには古代中世以来の修行としての側面が残っていると見えよう。しかし、それはかつての宗教者の修行とは異なり、さまざまな意味で現代的な修行である。本報告では、歩き遍路を現代的修行として捉える視点から、その意味について考えていきたい。

西大寺観音院 会陽・宝木争奪戦における身体

瀬戸 邦弘（鳥取大学教育センター）

「御福」を中心とする地域身体文化 - 西大寺観音院における会陽 -

はだか祭という呼称でも有名な岡山市西大寺観音院で行われる「会陽（えよう）」では、毎年行事のクライマックスに宝木争奪戦が営まれています。西大寺会陽は500年以上の歴史を持つと言われますが、この争奪戦において「宝木（しんぎ）」を手に入れたものは「福男」となり、当該地域で一生の名誉と幸せを手に入れることができると云われます。そもそもこの行事が「はだか祭」と呼ばれる理由は争奪戦の参加者がはだか（締め込み姿）となり清浄無垢さを手に入れ、神仏との交渉が叶う姿で参加するからです。毎年西大寺では霊験あらたかな宝木を求めて人々が集い、激しい争奪戦が繰り広げられ地域の春の風物詩となっています。

会陽が近づくと参加者はこの「御福」を授かれるように精進潔斎しこの日を待ちます。実は、往時は山陽・四国地方を中心に多くの場所で会陽習俗は営まれており、その数は岡山県内を中心に100カ所以上あったといわれます。ところで、連綿と受け継がれてきた会陽とその文化もその歴史の中で社会と呼応するようにその姿を変えてきました。たとえば、参加者の出で立ちや、争奪戦など行事を構成する中心的要素も、時々の価値と相克しながらその姿を変容させることになってきたのです。現在、刺青の排除やサポーターの装着の制限、そして飲酒者の参加不可など参加者そのものの在り方に多くの規制が発生することになっています。これらの事例を踏まえて、本シンポジウムでは信仰とそれを実現するためのメディアとしての身体に注目し、それらが如何に地域の伝統的文脈の中で護られようとしているのか、また現在という文脈の中でどのように規制されようとしているのか。この視点から、一か月に渡る春迎の行事である西大寺会陽と地域が育む身体文化を紐解くことになります。



Figure 1 禁止事項の触書

<参考文献>

1. 朝日新聞出版(2004) 『日本の祭り (週刊朝日百科) 西大寺会陽・壬生の花田植・用瀬の流しびな』朝日新聞出版
2. 瀬戸邦弘 (2012)、「忘れられた日本人の“身体”」『日本人のからだ・再考』、瀬戸邦弘・杉山千鶴・波照間永子明和出版 pp.1-12
3. 三浦 叶(1985)『西大寺の会陽』日本文教出版
4. Kunihiro Seto (2005) “ Traditional and Acculturation of Ethnic Sports in Japan : Ball game “Eyou” ” International Journal of Sport and Health Science Vol.4 pp.171-178

六十里越街道と身体

鄭 稼棋（鹿屋体育大学）

出羽三山と呼ばれる月山,羽黒山,湯殿山は日本の山形県に位置し,そして,三重県の伊勢新宮に匹敵する誇りを持っている。羽黒山の山頂にある出羽三山神社は,月山,羽黒山,湯殿山に鎮座する三神をあわせて祀っている。伝説によると,ここを参拝すると,この三神に守護されると言われている。

昔時,信者らは自然対する崇拝や感謝の心を表すため,常に白装束と白菅笠で身を包み,徒歩で山頂まで辿り,神社を参拝する。出羽三山(月山,湯殿山,羽黒山)へ通じる「信仰の道」としての六十里越街道は,山形市,中山町,寒河江市,西川町,鶴岡市などを通る山道である。この道は,信者らが出羽三山参拝へ出掛けるための重要な道のみならず,平安時代の奈良に流通交易,宿場,茶屋,番所などの役割があるというのである。

しかしながら,明治時代以降,自動車の普及等により線形が改良され,山岳部間は古道となり,国道の改良や高速道路の整備に伴い,宗教と修行への街道としての機能は希薄になってきた。六十里越街道は機能の変化に伴い,また,2000年に出羽三山は国家重要文化財に認定され,古くより宗教の聖地である六十里越街道は現在,山形県にある重要な宗教ツーリズムとして観光資源化されてきた。

社寺仏閣,教会などは文化遺産や,世界文化遺産に登録された後,その観光事業をより推進するために,常にテーマパークの形で,商品の販売や,民族舞踊などのプロモーション活動を行い,宗教の聖地をツーリズム化するということである(駄田,2011)。数多くの史跡を保有する六十里越街道が,今では「信仰」,「自然」,「歴史」が体験できる観光スポットまでに至った。そこで,本研究は六十里越街道を対象に,宗教とツーリズムをめぐる発展,および「信者/観光客」の身体観を明らかにすることを目的とする。

3月26日(月)

一般研究発表 No. 1

ドイツにおける少年柔道の指導法の展開及びその現状

—ドイツ柔道連盟の取り組みを中心に—

ソリドーワル、マーヤ(津田塾大学)

ドイツにおいて柔道は、子供を中心とする生涯スポーツとして捉えている。現在、ドイツ柔道連盟の登録人口の半分以上は7~14才までの青少年からなる¹。この年齢層はドイツ柔道連盟の教育方針において柔道の基礎作り及び競技者への専門化の第一歩となる段階として重視されている。7~14才からの青少年を対象に、柔道の基礎作りを目的とする「昇級審査規定」が全国統一した指導内容のガイドラインになっていると同時に、競技者育成の基盤となる「柔道指導要領」もある。本研究において現在の「昇級審査規定」及び「柔道指導要領」まで至った少年柔道の指導法の歴史的な展開を教材の分析に基づいて(1)「新しい指導法の開発が始まった1970~1989年」、(2)「昇級審査規定が全国統一になった1990~1999年」と(3)「柔道人口が減少傾向になった2000年以降」という三つ期間に分けて考察し、現在のガイドラインの特性と課題をまとめてみる。

(¹ 2016年度の登録人口は150,279人となっていたが、その中で7~14才までの青少年の割合は76,090人となった。DEUTSCHER OLYMPISCHER SPORTBUND, *Bestandserhebung 2016*, Frankfurt am Main:DOSB, 2016, pp. 4-5 参照。)

一般研究発表 No. 2

スポーツと文化のはざままで

—スペイン・カタルーニャ州の人間の塔を事例に—

岩瀬 裕子(首都大学東京大学院)

ホブズボウムらによる『創られた伝統』で論じられているように、(近代)スポーツも文化も、近代[19世紀後半ないしは20世紀]のなかで起こってきたものであり、そういう意味では2つの概念とも近代の産物という同じ枠組みの中にある。発表者が事例として取り上げるスペイン・カタルーニャ州の人間の塔(*castells*)も「衰退期」と呼ばれる1890年から1926年のあいだに、つまり「伝統の創出期」にスポーツとされる一方で、文化としても扱われ始めた。本発表では、スポーツと文化によるせめぎあいが顕著に見られる人間の塔のグループ間で起きている子どもの移籍問題を整理する一方で、そうした枠組みからこぼれるものこそが、ひとびとの生活世界を支えていることを指摘する。

一般研究発表 No. 3

**日本の地域社会における伝統スポーツの文化資源的可能性：
岩手県久慈市山形町における「平庭闘牛」の形成と発展**

小木曾航平（早稲田大学）・田邊元（富山大学）

現在、日本では6つの場所で闘牛の定期大会が行われている。なかでも「東北唯一の闘牛」とされる岩手県久慈市山形町の「平庭闘牛」は、日本の闘牛文化の北限といえるだろう。本発表では、この平庭闘牛の形成と発展の歴史を明らかにしつつ、現代日本の地域社会における、伝統スポーツの文化資源的可能性について検討する。闘牛の舞台となる山形町はいわゆる「中山間地域」の特徴を有する典型的農山村である。日本の農山村が抱える人口減少、高齢化といった問題をここも共有している。そうした中、闘牛は当地の畜産を支える「山形村短角牛」の知名度を上げるだけでなく、域外からの交流人口増大に資する観光資源としても注目されている。他方、闘牛はそれを継承する人々にとって、彼らの生そのものにも深く結びついている。本発表では、闘牛が農山村に住まう人の生の形式にどのように関係しているのかに着目しながら、その文化資源的可能性を多角的に考察する。

一般研究発表 No. 4

**「竿灯祭りに出たい！」
—県大竿燈会にみる担い手の多様化と地域コミュニティの再編成—**

田邊元（富山大学）、小木曾航平（早稲田大学）

本発表では、観光化した日本の伝統スポーツにおいて多様化する担い手とそれに呼応する地域コミュニティの再編成がどのように進展するかについて、その地域の文脈に即して検討する。事例として扱うのは、秋田市の国重要無形民俗文化財である「竿燈祭り」とそこに参加する「秋田県立大学竿燈会（以下、県大竿燈会）」である。県大竿燈会は、学生を中心に2001年に結成された大学公認サークルである。

今日の竿燈祭りは、市内の町内会で作られる伝統的な竿燈会に加えて、企業や大学が組織する新規の竿燈会を多く抱える。県大竿燈会もこうした“よそ”からの参加者である。そうした中、県大竿燈会は大学生という限定的な立場を、彼らの竿燈の特徴に活かし、“よそもの”としての独自のポジションを築いている。そして今や伝統的な竿燈会が一目置く存在へと変貌しつつある。本報告では、県大竿燈会の歴史、活動、

そして祭り当日の活躍の様子を分析する。

一般研究発表 No. 5

大崎上島における権伝馬への商船高専としての支援の現状と課題

柴山 慧（広島商船高等専門学校）

本研究では広島商船高等専門学校（以下、本校）が平成26年～29年に実施された大崎上島の権伝馬に関する支援事業についての報告、現状と課題について考察することを目的とした。その結果、大崎上島でおこなわれた東野住吉祭では、チーム参加だけでなく、救護対応、ポスター作成、紹介動画の作成、物品の貸し出しなど多岐にわたる活動を実施し、祭の盛り上がりにも貢献することができた。木江十七夜祭では、カッター部で編成されたチームが競漕トーナメントに参加し、それを通じて現地住民や大崎海星高校の生徒と交流ができたが、引率の面において課題も残った。沖浦秋季例大祭では、祭の人手不足を補い、盛り上がりにも貢献することができたが、学生の参加のさせ方については、現地住民からの要望を必ずしも満たしているわけではなく、次年度に向けて検討課題の多いものとなった。また、学生へのアンケート調査から、活動に関しては大半の学生が好印象を持って終われたということ、商船高専の学生は権伝馬について少なからず興味を持っていること、地元住民との交流に満足感を感じていることがわかった。

3月27日(火)

一般研究発表 No. 6

『中国古典舞教学体系創建発展史』にみる現代中国舞踊の歩み

フーサンカ
富燦霞 (明治大学アジア太平洋パフォーミング・アーツ研究所)

中国古典舞踊の伝承は代々宮廷舞踊隊によって担われてきたが、清王朝の崩壊によりその伝承体制が途絶えた。一方、元代から発展し封建社会末期に開花した中国戯曲にとって、舞踊表現は欠かせない重要な要素であるため、豊かな伝統舞踊を始め、様々な民間舞踊・武術なども吸収され、発展してきた。古典舞踊の伝承体制が途絶えた後、戯曲の中の舞踊表現は、舞踊家たちに注目され、以来現代中国舞踊発展の根源となった。中華人民共和国の建国以降、中国古典舞踊及びその訓練体系の創建が積極的に行われてきた。約50年間の創建発展における歴史が『中国古典舞教学体系創建発展史』に詳細に収録されている。本発表では、『中国古典舞教学体系創建発展史』を中心に現代中国が再創造した中国古典舞踊の変遷を考察する。

一般研究発表 No. 7

日韓併合時代(1910-1945)における「處容舞」の分析

蔡美京 (明治大学アジア太平洋パフォーミング・アーツ研究所研究推進員)

韓国宮中舞踊の中でも唯一仮面を被って踊る處容舞は、新羅(憲康王 875-886)時代に始まり、高麗朝鮮時代(~1910年)まで踊られてきた。無形文化財調査報告書(第60号)によれば、「三国遺事」、「高麗史樂志」、「樂学軌範」などの古文献で、その起源と伝搬が比較的、正確性を持っているとされている。

處容舞は、1910年の日韓併合により中断されたが、1923年に、純宗王(1874-1926)の誕生50年祝賀公演の為に、当時の李王職雅楽部の雅楽部生により、学習が再開された。本発表は日韓併合以降から現代までの「處容舞」を分析するための第一段階として、日韓併合時代の文献と映像資料を基に、舞踊の構成、動作に絞って比較分析を行い、文献の示す内容と、実際の映像の合致点と相違点を考察する。

【文献資料】

2004「處容研究」文一志

2000「處容舞」李興九 火山文化

一般研究発表 No. 8

新たな琉球舞踊の創出
—「伝統」と「創造」の狭間で揺れ動く若手舞踊家の事例から—

高井賢太郎（沖縄県立芸術大学大学院舞台芸術専攻修士課程）

本発表の目的は、琉球舞踊を創作する活動を通して、伝統芸能の担い手である若手舞踊家が「伝統」と「創造」の狭間で揺れ動く様相について検討することである。

現在、琉球芸能を担う若手芸能家の多くが、「研究所」といった師匠-弟子関係から成り立つ徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、近年では高等教育機関で琉球芸能を修練しながら、芸能活動を展開している。そのような彼らの実践には、琉球芸能に対する捉え方や価値観の変化がみられ、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい伝統芸能を創出している。しかしながら、その一方で若手芸能家たちが「伝統」の維持も意識しているといった側面もあり、芸能を実践するにあたって「伝統」と「創作」のはざままで揺れ動いている様子も見られる。

そこで、本発表では、神奈川県出身の発表者が沖縄という場所で創作した琉球舞踊の作品をもとに、どのように「伝統」と「創造」を取捨選択していくのかについて検討する。

一般研究発表 No. 9

盆踊りの多義性
—健康文化の側面に着目して—

弓削田綾乃（人間総合科学大学）

日本では、盆の時期に地域性の強い舞踊、いわゆる盆踊りが踊られてきた。それは現代社会で夏の風物詩ともなり、祖霊信仰にかかわる儀礼的意味合いを受け継ぐものもあれば、コミュニティの交流や娯楽の一環、心身の健康に寄与する身体活動として注目される事例も見受けられる。そうした盆踊りの多義性の中でも、本研究は健康文化という側面に着目する。文献を中心に、関連する取り組みの実態を探るとともに、盆踊りそのものの諸特性から健康文化となりうる要因を検討したい。一説では、平安時代の念仏踊りが起源と言われる盆踊りの、現代社会における伝承意義の一端を考察

する。

一般研究発表 No. 10

米国・ハワイ州におけるルア Lua の伝承

高橋京子（フェリス女学院大学）

本発表では米国・ハワイ州において、発祥し伝承されているマーシャルアーツのルア(カプ・クイアルア)Lua を対象に、秘技ともいわれてきたマーシャルアーツの実態に迫ることを本研究の目的とする。ハワイ人は口承による伝承形態が主であったため、実際のところ今もルアの起源は明らかとなっていない。しかしながら、ルアはハワイの伝統的な舞踊のフラの祖先と言われたり、ルアはフラから生じると言われたり、舞踊のフラとも通じるものであることが知られている。本発表ではまずは文献調査を中心に、ルアとはどのようなものであるのかを検討する。

一般研究発表 No. 11

ブラジルにおける格闘技の意義

菱田慶文（四日市看護医療大学）、細谷洋子（四国大学）、中嶋哲也（茨城大学）

ブラジルは、格闘技が盛んな国である。ブラジルの代表的なカポエイラの他、柔道がブラジル人によって、改良され世界に伝播したブラジリアン柔術(BJJ)の他、MMA(総合格闘技)やムエタイなども盛んに行われている。そのようなブラジルでの格闘技の位置づけや格闘技観・教育観・娯楽観などを明らかにする試みとして、研究を始めた。現在、カポエイラは、奴隷時代の産物であったネガティブなイメージから、ブラジルの多様性という「強み」を表象するスポーツとして国家的なイメージの転換が行われている。また、MMA(シュートボクセ)などでは、日本のマスコミの凶暴性を煽る映像とは、対照的に、貧民街での社会救済や教育的なスポーツとして、普及したいという理念が見受けられた。また、柔道やBJJにおいてもグレーシー一族が普及し始めた初期段階は、富裕層のスポーツであったが、現在は、ファベラなどの貧民街でも広く教えられていることが明らかになった。

一般研究発表 No. 12

**カポエイラの身体技法「ジンガ」と理念マリーシア
—ブラジルサッカーを題材にした映画による描写を手掛かりにして—**

細谷 洋子（四国大学）

カポエイラにおける理念「マリーシア」はラテン語の malitia を語源とし、もともとは「悪事、いかさま」といった否定的なイメージの語であった。しかし、現在では「機転が利く、知恵がある」という、むしろ肯定的な用法に転じている。

こうした意味合いは、ブラジルサッカーにおける選手の個人技においても用いられ、ブラジルサッカーの特徴といわれてきた。発表者は、カポエイラにおいて目指される「マリーシアのあるゲーム」という実践者間で共有される基準について、これまでも実際のゲームの動画資料を基に、戦術パターンを抽出し、傾向を明らかにしてきた。

それを踏まえて、本研究では、ブラジルサッカーを題材にした映画における描写を手掛かりに、「マリーシア」やその理念が具現化される身体技法「ジンガ」が、どのように捉えられているのかを検討することを目的とする。

一般研究発表 No. 13

**源了圓の「型」論再考：
新陰流の稽古法を事例にして**

中嶋哲也（茨城大学教育学部）

これまでの武道の研究者は、日本思想史家・源了圓の「フォームとしての型」論をほぼ無批判に踏襲してきた。源は「フォームとしての型」について「ある形がとくに選択され…その形の現実化を持続的なものとしようとする努力・精進の積み重ねの過程において飛躍的に体得された…完成された形」（源了圓「型と日本文化」『型と日本文化』、創文社、1992年、p. 29）と述べている。これは現在の柔道や剣道の形が同じ所作を反復的に実践されることから容易にイメージされるだろう。

しかし、フォームとしての型が古流武術の稽古に当てはまるかどうかはこれまで検